第39回 読書感想文コンクール

作品集2025
利尻富士町立
鬼脇公民館

第三十九回 読書感想文コンクール作品集の発刊にあたって

利尻富士町教育委員会
教育長　吉田　秀昭

利尻富士町の子どもたちの豊かな感性と、読書にかける情熱の結晶である「第三十九回 読書感想文コンクール作品集」が、このたび無事に発刊の運びとなりましたことを、心よりお慶び申し上げます。

本コンクールには、小学生三十一編、中学生四十九編、合わせて八十編もの応募が寄せられました。その中から厳正な審査の結果、二十二編の作品が受賞の栄誉に輝きました。作品集には、それぞれの受賞作が織りなす感動の物語が詰まっています。言葉の選び方や、表現の奥行き、思考の深さに、審査員一同、感銘を受けました。受賞した子どもたちはもちろん、惜しくも受賞に至らなかった子どもたちも、このコンクールを通じて言葉の力、そして心を磨いてくれました。その経験は、未来へとつながる貴重な財産となることでしょう。

本コンクールは、子どもたちだけの力で成し遂げられるものではありません。日頃から子どもたちの読書活動を温かく見守り、励ましてくださるご家庭や地域の皆様。そして、子どもたちに寄り添い、丁寧なご指導をいただいた学校関係者の皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。皆様の支えがあってこそ、子どもたちは安心して読書に親しみ、自らの想いを表現することができました。

この作品集が、子どもたちにとって自らの努力の証となるとともに、多くの町民の皆様にとっても、本と子どもたちの豊かな世界に触れる機会となることを願っております。未来を担う子どもたちが、これからも読書を通じて心を磨き、未来を力強く歩んでいくことを願い、発刊にあたっての挨拶といたします。

【作品集　目次】

小学校一学年の部

優秀作
「かってもまけてもいいんだよ」をよんで
鴛泊小学校　一年　長谷川（はせがわ）　柑那（かんな）・・・4

★佳作
「おばけのなつやすみ」をよんで
鴛泊小学校　一年　川村（かわむら）　花里菜（かりな）・・・4

「りんごかもしれない」
鴛泊小学校　一年　本島（もとじま）　琴乃（ことの）・・・5

小学校二学年の部

優秀作
「おうさまのたからもの」を読んで
鴛泊小学校　二年　綿谷（わたや）　玲音（れお）・・・6

★佳作
「はれときどきぶた」をよんで
鴛泊小学校　二年　稲川（いながわ）　湊太（そうた）・・・6

小学校三学年の部

優秀作
「りんごかもしれない」を読んで
利尻小学校　三年　浅岡（あさおか）　奏汰（かなた）・・・7

★佳作
「じゅげむ」を読んで
利尻小学校　三年　髙橋（たかはし）　聖純（せつな）・・・8

小学校四学年の部

優秀作
「すいどう」を読んで
利尻小学校　四年　石川（いしかわ）　万尋（まひろ）・・・9

★佳作
「きみのそばにいるよ」を読んで
利尻小学校　四年　飯田（いいだ）　惟華（しいか）・・・9

「願いがかなうふしぎな日記」を読んで
鴛泊小学校　四年　大関（おおぜき）　夕楓（ゆうか）・・・11

小学校五学年の部

★ 奨励賞

「ノラネコぐんだんと海の果ての怪物」を読んで

利尻小学校　五年　土上（つちがみ）　凌央（りょう）・・・12

小学校六学年の部

優秀作

「チビ竜と魔法の実」を読んで

鴛泊小学校　六年　川村（かわむら）　柚珠月（ゆずき）・・・13

★ 佳　作

『「どうせ無理」と思っている君へ　本当の自信の増やし方』を読んで

利尻小学校　六年　牧野（まきの）　泰希（たいき）・・・14

中学校の部

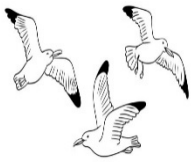
優秀作

「鏡の孤城」

鴛泊中学校　一年　八重樫（やえがし）　千夏（ちなつ）・・・16

君と会えたから

鴛泊中学校　二年　廣澤（ひろさわ）　一心（いっしん）・・・17



★ 佳　作

「透明なルール」を読んで

鴛泊中学校　一年　岩木（いわき）　莉那（りな）・・・18

「読書感想文が終わらない！」を読んで

鬼脇中学校　一年　山谷（やまや）　詩葉（ことは）・・・19

あの花が咲く丘で君とまた出会えたら

鴛泊中学校　二年　佐々木（ささき）　凛花（りんか）・・・20

52ヘルツのクジラたちを読んで

鴛泊中学校　三年　工藤（くどう）　結菜（ゆな）・・・21

「知らぬ間に」

鴛泊中学校　三年　須田（すだ）　海司（かいじ）・・・22

★ 奨励賞

「障害者からみた社会の不安と恐怖」

鴛泊中学校　二年　谷村（たにむら）　柊太（しゅうた）・・・23

13歳からの地政学

鴛泊中学校　三年　矢田（やだ）　蓮允（れいん）・・・24

小学校一学年の部

優秀作

「かってもまけてもいいんだよ」をよんで

鴛泊小学校　一年　長谷川　柑那

がすとんは、できないことがあると「いやだ」といってあそびをやめてしまうこでした。おかあさんに、「しっぱいしてもがんばってれんしゅうするといいよ。たのしむことがだいじ。」といわれてから、いろんなことをがんばるようになりました。

わたしも、じてんしゃでさかみちをのぼれなくてなんかいもころびました。いたいから、「もうやりたくない。」とおもいました。でも、みんなといっしょにあそびたいし、できるともだちがうらやましいとおもったので、れんしゅうしました。

おかあさんが「できるできる」とはげましてくれたのでがんばれました。おもいっきりこいで、さかのうえまでのぼりきれたときは、うれしくて、おかあさんとはいたっちをしました。きっと、がすとんも、できることがふえてうれしかっただろうとおもいます。

できないことも、ひとつずつがんばることがだいじだとおもいます。かってもまけても、できないことがあっても、ともだちとわらいあって、たのしくすごしたいとおもいました。

＊こうひょう＊

登場人物と自分を重ねて、似たような経験を書けているのがとてもよかったです。頑張った思い出を振り返りながら、読書ができたのではないかと思います。

「きっと、がすとんも、できることがふえてうれしかっただろうなとおもいます」という登場人物の気持ちについて考えられているのも素敵でした。

★佳作

「おばけのなつやすみ」をよんで

鴛泊小学校　一年　川村　花里菜

わたしがこのほんをよんだりゆうは、えがかわいくておもしろそうだなとおもったからです。

このおはなしには、みなみのまちへさかなをはこぶトラックうんてんしゅのよねこおばさんとかわいいおばけいっかがでてきます。よねこおばさんがつりをおしえたりして、たくさんあそびました。さいごは、みなみのしまにおはなをぬすみにきたどろぼうたちをやっつけるおはなしです。

よねこおばさんがおばけたちにやさしくしていたところがとてもいいなぁとおもいました。わたしもいっしょにいたら、つりやはなびをしたいなぁとおもいました。

このほんをよんでわたしは「はたらくのはたいへんだけど、おやすみをたのしんだらまたがんばれるんだなぁ。」とおもいました。

＊こうひょう＊

登場人物とできごとをしっかりつかんで読めています。その上で、「わたしもいっしょにいたら、つりやはなびをしたいなぁとおもいました」ともしもの想像ができていて、本を楽しく読めたのではないかと思いました。

字がきれいで用紙の使い方も良く、読みやすかったです。

★佳作

「りんごかもしれない」

鴛泊小学校　一年　本島　琴乃

わたしは、「りんごかもしれない」というほんをよみました。このほんをえらんだりゆうは、ひょうしをみておもしろそうとおもったからです。このおはなしは、あるひがっこうからかえってくるとテーブルのうえにりんごがおいてあって、でもそのりんごはもしかしたらりんごじゃないのかもしれないと、いろいろそうぞうしていくおはなしです。

このおはなしのなかでわたしは、うちゅうからおちてきたちいさなほしなのかもしれないというところがいちばんすきです。ちいさなうちゅうじんがいっぱいいるのかもしれない、3ミリのりんごせいじんがとてもかわいいとおもいました。

もしも、ちいさなりんごせいじんがいたらりんごのほしにかえしてあげたいなとおもいました。ほかにも、こころがあるのかもしれないというところも、おもしろくてじぶんならこうかもしれないとそうぞうできてたのしくなれるのでおすすめです。

いろんなりんごのそうぞうができてすごくおもしろかったので、たまにいえにあるものや、そとでみたりかんじたものをいろいろとそうぞうしてかんがえるちからをつけられるようにしたいとおもいました。

＊こうひょう＊

「そうかもしれない」と想像しながら物を観察するのはとても面白いことです。それを本を通じて感じられたのだなと嬉しくなりました。

好きな場面について感想と、自分だったらこうするということが書けているのも良かったです。

小学校二学年の部

優秀作

「おうさまのたからもの」をよんで

鴛泊小学校　二年　綿谷　玲音

ぼくが、「おうさまのたからもの」をえらんだりゆうは、絵がカラフルできれいだったのと、お母さんが妹に読んでいておも白そうだったからです。

この本は、すてきなはこをもった王さまがたからものをさがしに町や森へ行って、やさしいどうぶつやこまっているお魚に出会います。さいごは大切なたからものが見つかるお話です。

ぼくが心にのこったところは二つあります。

一つ目は、お魚をたすけるために入れたはこの水がかがみになって空の星がうつっていたところです。とてもうつくしかったです。

二つ目は、王さまがたからものに気づくところです。ほう石やとけいよりも、みんなですごした時間ややさしさが大切だと思いました。

自分のたからものは何か考えたけれど一つにしぼれませんでした。この本を読んで、かぞくや友だちと一しょにいられる時間を大切にしようと思いました。

＊こうひょう＊

物語の中でおうさまが見つけたたからものから、自分のたからものについて考えを広げられています。誰かと過ごす時間を大切にしようと思えたことはとても素晴らしいことだと思います。

本を選んだ理由の中でも「お母さんが妹に読んでいて」という部分がありましたが、それもご家族との時間を大切に思っているからこそ、気付けたのではないかと勝手に嬉しくなりました。

★佳作

「はれときどきぶた」をよんで

鴛泊小学校　二年　稲川　湊太

お母さんが学校からもらってきた図書だよりを見て「はれときどきぶたってママが小学生のときからある本なんだよ。」とおしえてくれたので、ぼくもよんでみることにしました。

よんでみたらおもしろすぎてスラスラすぐよんでしまいました。

中でも一ばんおもしろかったところは、十円やすがあしたの日記の天気のところに、はれときどきぶたとかいたら、つぎの日に本とうにぶたがふってきたところです。

ぼくだったらはれときどきぶたじゃなくてはれときどき一万円さつとかくのになぁと思いながらよみました。

じっさいにはそんなことはおこらないけど、そうなったら、ぼくのちょ金ばこはいっぱいになるし、すきなゲームをかえるなと思うけれど、わるいことをかいてしまったら、それが本とうになってしまうので、それはイヤだなと思いました。

＊こうひょう＊

本を選んだ理由に心温まりました。親子で同じものを読んで物語を共有できるのはとても素敵なことだと思いました。

物語で起こったことを自分だったらこうするのに、ということを書けていて、しかも良いことと悪いことを合わせて考えられているのが良かったです。

小学校三学年の部

優秀作

「りんごかもしれない」を読んで

利尻小学校　三年　浅岡　奏汰

ぼくが読んだ本は、ヨシタケシンスケさんの『りんごかもしれない』です。この本を読んだ理由は、題名が「りんごかもしれない」って書いてあって、どういう意味だろう？と面白そうだと思ったからです。表紙にもいろんな絵が描いてあって、次にどんなお話が始まるんだろうとワクワクしました。

この本の中で好きな場面は二つあります。

一つ目は、男の子がお母さんに「歯みがきしたよ！」とウソをついているときに、りんごが「してないね」と言っているところです。りんごが心の中を見すかしているみたいで、思わず笑ってしまいました。

二つ目は、最後におもいきってりんごを食べる場面です。りんごが何なのか、男の子はいろいろ考えていたけど、最後は自分の目で確かめる姿がすごいなと思いました。

この本を読んで、自分と男の子を比べてみました。ぼくはりんごを見ても、ただのりんごだと通り過ぎてしまうだけです。でも、この男の子は、りんご一つから「これは地球かもしれない」「他に兄弟がいるかもしれない」など、たくさんのことを想像できるのがすごいと思いました。どんなに想像力が豊かなんだろうとびっくりしました。

このお話から、ぼくのこれからの生き方に役立つことが見つかりました。男の子がりんごを見て、すぐに答えを出すのではなくて、いろんな可能性を考えているのを見て、「自分も何かに出会ったときに、すぐに諦めずに、いろんなことを考えてみよう」と思いました。

例えば、うまくいかないことがあっても、すぐに「もうだめだ」と決めつけずに、「こうしたらどうかな？」「違う方法はないかな？」ともっと深く考えてみることが大切だと教えてもらった気がします。

＊講評＊

全体としてまとまりが良く、この作品をじっくり楽しめたのだろうなあと思える感想文でした。「りんごが心を見すかしているみたい」「どんなに想像力が豊かなんだろうとびっくりしました」など、自分の気持ちを的確に表現しているのが特に良いなと思いました。

登場人物の男の子の行動をよく観察し、自分もこうしてみようという学びを得ているのも良かったです。今後に活かそうという気持ちがしっかり伝わってきました。

★佳作

「じゅげむ」を読んで

利尻小学校　三年　髙橋（たかはし）　聖純（せつな）

ぼくが読んだ本は、川端誠さんの『じゅげむ』です。ぼくは落語が好きなので、この本を読んでみました。表紙にいろいろな字が書いてあって、どんなお話なんだろうと気になったし、「じゅげむ」という題名も、とても謎めいていて面白そうだなと思ったのが、この本を選んだ理由です。

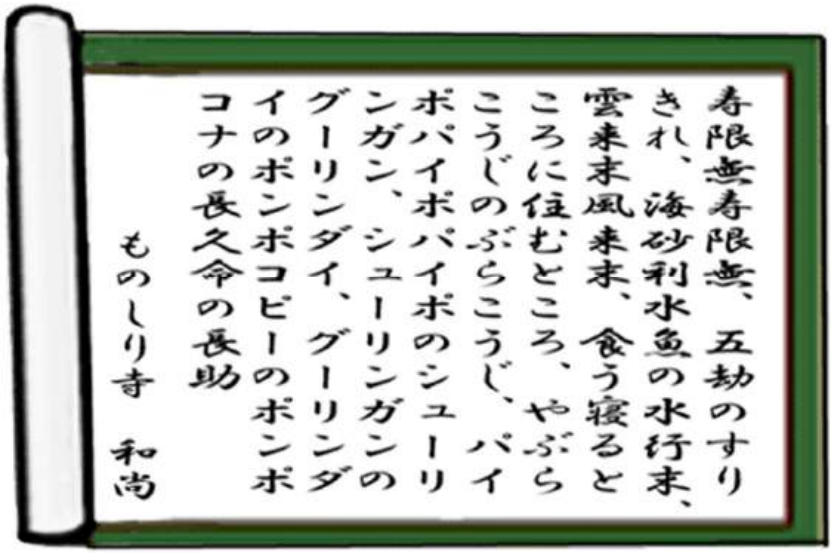
この本で一番好きな場面は、主人公の子供に名前を決める場面です。和尚さんがいろいろな言葉を考えてくれて、名前の単語が全部で十三個もあったのがすごいと思いました。和尚さんは、「めでたい名前をつけるのが得意なんだな」ということが、この本を読んでぼくにはよくわかりました。縁起の良い言葉がたくさんつながった、長くて不思議な名前で、声に出して読むのが楽しかったです。

このお話の最後の場面は、ケンカをするお話でした。でも、やり返したり、相手を押したりするのはいけないことだと、ぼくは思いました。

このことから、今後の自分の生き方や考え方に生かせそうなことがあります。二学期も始まるけれど、学校で友達とケンカになったときに、この「じゅげむ」のお話みたいに、すぐに手を出したりやり返したりしないで、ちゃんと話し合って解決できるように頑張っていこうと思いました。この本を読んで、我慢することや、優しくすることの大切さを改めて感じることができました。

＊講評＊

自分の「好き」から本を選べているのが良かったです。じゅげむの長くて不思議な名前を「声に出して読むのが楽しかった」という言葉からもわかるように、作品を楽しく読めていたのだと感じられました。落語を好きになったきっかけはあったのでしょうか。気になりました。



小学校四学年の部

優秀作

「すいどう」を読んで

利尻小学校　四年　石川（いしかわ）　万尋（まひろ）

私が読んだ本は、百木一郎さん作の『すいどう』です。この本は、公民館の図書室でおすすめのところに置いてあったから読んでみました。

この本を読んで、毎日使っている水がどこから来ているのかよくわかりました。特に好きな場面は、水が山から流れてくる様子や、その水が色々な場所で使われているところです。朝顔に水をあげたり、お風呂に入ったり、料理を作ったりと、私たちの生活には水が欠かせないんだと改めて思いました。

本を読んでいて、いくつか疑問に思ったことがあります。山から流れてきた水が浄水場に行くことはわかったけど、私たちが住んでいる利尻島の浄水場はどこにあるのかな？と思いました。それから、冬には雪がたくさん積もって川が凍ったり、水が流れにくくなったりするけど、そんな時はどうやって水を送っているんだろう？と不思議に思いました。

この本を読んで、水道管に穴があいたりして修理する場面が出てきたのですが、コンクリートを切ったりスコップで土を掘ったりするのが、とても大変そうだと思いました。たくさんの人が頑張ってくれているから、きれいな水が使えるんだなと感謝の気持ちでいっぱいになりました。そして、お水は一度使ったら終わりではなくて、何度も繰り返し使われているということも知って、びっくりしました。

これからも、水の大切さを忘れずに、無駄遣いをしないように気をつけたいです。そして、利尻島の水道のことも、もっと調べてみたいと思いました。

＊講　評＊

身近な水について関心を持ちながら読書ができており、自分が住んでいる利尻の水のことにまで目を向けられているのがとても素晴らしいと思いました。気になったことをぜひ調べてみてください。

本を通して水の大切さやその水が使えるようにさまざまな人が頑張っていることに気付き、感謝の気持ちを持てているのも素敵でした。

★　佳　作

「きみのそばにいるよ」を読んで

利尻小学校　四年　飯田（いいだ）　惟華（しいか）

私が、この本を読もうと思ったきっかけは、イラストの動物たちがとてもかわいかったからです。しかし、読んでいくうちにイラストだけではなく、お話の内容もとても勇気をくれる本でした。

登場人物は森にいる動物たちです。

ニホンアナグマ、ホンドギツネ、エゾナキウサギ、ホンドオコジョなど、小さくてふわふわの十九種類の動物たちが、お月様の下でおしゃべりをしているのですが、それは夜になるとさみしくて、だれかに会いたく

なって、やさしいこえが聞きたくなっておしゃべりをしているという内容でした。

読んでいくうちに、物語というより、やさしいメッセージが、わかりやすく書いてあったので、文字を読むのが苦手な私でも、スラスラと読むことができました。

一番のお気に入りのメッセージは、エゾシマリスの親子の会話です。

「どうか、わすれないでね。感じかたがほかの人とちがっていてもよいことを。あなたの感じたものはすべてあなたのたからもの。うつくしくてかけがえのないたからもの。」

みんなとちがってもいいんだ、むりに合わせることをしなくてもいいんだと感じると、とてもやさしい気持ちになりました。

反対に、人がもしちがうことをしても、その人にはその人の考え方があり、みんなちがってあたり前なんだということに気づきました。

この本の最後には、月の満ち欠けのよび方ものっていて、月のないときを新月、そこから二日目が三日月、七日目が上弦の月、十四日目でやっと満月になり、また反対側に消えていくということがわかって、月の勉強もすることができました。

自分にも、人にもこの本のメッセージを伝え、ありがとうの気持ちを忘れないようにしようと思いました。

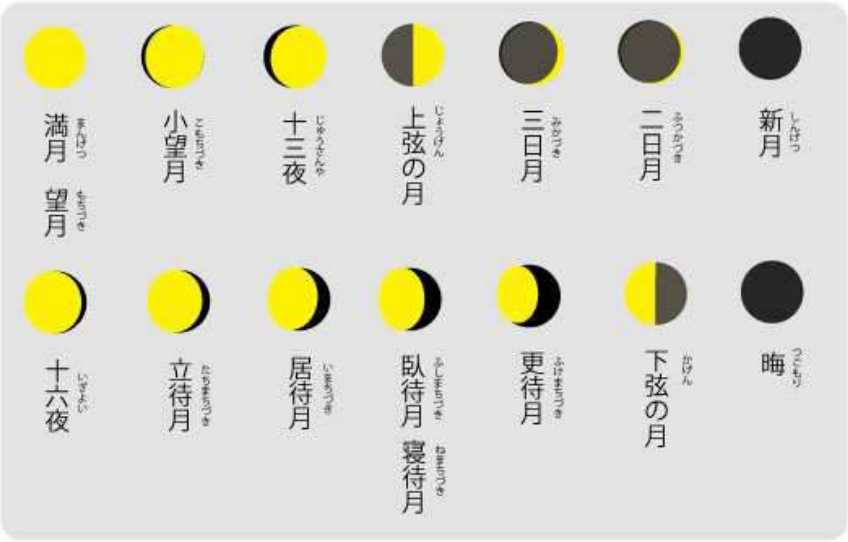
＊講　評＊

文字を読むのが苦手と書いていましたが、自分に合った作品を選べており、本に込められたメッセージを丁寧に受け取っている印象を受けました。

「みんなとちがってもいい」という当たり前のようで、当たり前ではない考え方に気付けたのも良いですね。

いろいろな月の呼び名

満ち欠けによる呼び名



季節による呼び名

春月・・・春の月　夏月・・・夏の月　秋月・・・秋の月　冬月・・・冬の月

朧月　ほのかにかすんで見える春の夜の月

寒月　冬の夜の冷たくさえわたった光の月

各月ごとの満月の呼び名

1月　Wolf Moon　狼月

2月　Snow Moon　雪月

3月　Worm Moon　芋虫月

4月　Pink Moon　桃色月

5月　Flower Moon　花月

6月　Strawberry Moon　苺月

7月　Buck Moon　牡鹿月

8月　Sturgeon Moon　チョウザメ月

9月　Harvest Moon　収穫月

10月　Hunter's Moon　狩猟月

11月　Beaver Moon　ビーバー月

12月　Cold Moon　寒月

★佳作

「願いがかなうふしぎな日記」を読んで

鴛泊小学校　四年　大関（おおぜき）　夕楓（ゆうか）

わたしは本を読むことはすきで、いつも本を読みます。だから、学校からの宿題で読書感想文がでた時にはなんの本を読もうかなー？と思いました。せっかくなのであまり読んだことがない本を読みたいと思い、くつがたのとしょかんへ行きました。すると、「願いがかなうふしぎな日記」という本がありました。この本を手にしたときに、願いがかなう日記っておもしろそうだなー！という気持ちになりました。読むのを楽しみにしながら家に帰ってすぐに読みはじめました。

「願いがかなうふしぎな日記」には、「ぼく」が出てきます。この人は自分のへやのかたづけをしていて、きっかけは、かけづけなさいとお母さんにいわれて、かたづけている時、引きだしの中からなくなったおばあちゃんからもらった絵日記がみつかります。そして、おばあちゃんからもらった日記には願いをかくと、そのことがかなうお話です。

この本で気になったところは、どうやって願いをかなえるのかというところです。ここが気になった理由は日記に願いをかいてかなうのがふしぎだからです。「ぼく」が、日記の一ページ目に「もういちどおばあちゃんにあいたい」とかいたのを読んで、わたしは、おばあちゃんがなくなってかわいそうだなと思ました。

また、二ページ目に「石原さんにもう一度会いたい」と、かいたところが気になりました。

「ぼく」はその時、石原さんに会いたかったのでぼうしをかえしたいのかなと思いました。

わたしは「ぼく」の行動に対して、やさしいとかんじました。

わたしは「ぼく」のようになりたいです。

他にも、六ページ目に「ぼくは泳げるようになった！」とかいてあるところが気になりました。なぜなら、かいたら泳げるようになると思っていたので、二十五メートル泳げるようになるとかいてほんとだったらふしぎに思います。わたしが「ぼく」なら、わたしも泳げなかったら日記にかきます。

七月、プールでわたしは泳ぐれんしゅうをしていました。なぜなら泳げるようにれんしゅうをしたかったからです。このとき、わたしは、泳ぐのができるようになって、うれしい気持ちになりました、このことから「ぼく」も二十五メートル泳げるようになってうれしい気持ちだったのかなと思いました。

この本を読みおわって、わたしは願いがかなう日記ってすごいな！という気持ちになりました。日記にかいたことは、まほうではなく、自分がのぞんでどりょくするから実げんしたということがわかったので、これから、自分からがんばっていろんなことをできるようにしていきたいです。

＊講評＊

本を読んでいる中で不思議に思ったこと「どうやってねがいをかなえるのか」に対して、しっかりと答えを見つけられています。

また、自分自身の経験から感じたことを、登場人物の気持ちとして想像できているのも良かったです。

文章の引用がページ数まで書いてあって丁寧だと思いました。

小学校五学年の部

★　奨励賞

「ノラネコぐんだんと海の果ての怪物」を読んで

利尻小学校　五年　土上（つちがみ）　凌央（りょう）

ぼくの選んだ本は『ノラネコぐんだんと海の果ての怪物』というお話です。作者は工藤ノリコさんです。

なぜこの本を選んだかというと、題名に「海の果ての怪物」と書いてあってその怪物が何か気になったからです。他には表紙のノラネコ軍団が可愛かったからです。

どんなお話かを紹介します。ノラネコ軍団たちがお魚を食べて暮らしていました。しかし、どんどんお魚を粗末にしていきました。そして海の王様のいる宮殿に呼ばれ裁判にかけられます。ですが海の王さまは、「海の果ての怪物にさらわれたお姫様を助けたら許してやる」といいました。それでノラネコ軍団の八匹はお姫様を救う冒険にでかけるというお話です。

登場人物はノラネコ軍団のノラネコ八匹、カジキ、海の国の王様、海の国にいた魚たち、お姫様、海の果ての怪物（大きなタコ）、カニ、鳥の卵です。たくさんの登場人物がいて面白かったです。特に好きな登場人物は主人公のノラネコ八匹です。理由は可愛らしい見た目だったからです。

お話の中で心に残った場面がいくつかあります。

一つ目はノラネコ軍団たちが海の王様に裁判にかけられるところです。理由はノラネコ軍団はどうなってしまうのだろうとドキドキしたからです。

二つ目はノラネコ軍団が海の果てまで冒険に行っているときに、食料を探す場面です。理由は、カニ、鳥の卵に出会って食べようとしたがカニはたくさん子供がいるから、鳥の卵は、外の世界が見てみたいから、という理由を聞いて食べないように我慢していたところが優しいなと思ったからです。

三つ目はお姫様を助けるときに海の果ての怪物と出会って戦うところです。理由はノラネコ軍団たちだけだと負けそうになってしまいましたが、カニ、鳥の助けで海の果ての怪物を撃退したからです。このときに僕は優しさは、いつかじぶんのためになるんだなと感じました。その後お姫様を連れて帰ってきてノラネコ軍団たちは助かりました。

この本を読んで思ったことは、ノラネコ軍団たちがお姫様を助けていてかっこよかったです。そして学んだことは人にやさしくすると、いいことがあるとわかったことです。これからは、人に優しくして気持ちいい生活を送りたいです。

＊講評＊

物語を通して「優しさは、いつかじぶんのためになる」ということに気付き、今後に生かそうという気持ちが伝わってきました。

本を選んだ理由に「海の果ての怪物」が何か気になったと書かれていましたが、結局どんなものだったのか（タコとは書いていましたが）、正体が分かったときに何を感じたのか、など書けるとより良かったと思います。

小学校六学年の部

優秀作

「チビ竜と魔法の実」を読んで

鴛泊小学校　六年　川村（かわむら）　柚珠月（ゆずき）

私がこの本を読んだ理由は、表紙に竜とキツネ、人間の子どもが描かれていて、「魔法の実」という言葉にどういう意味があるのか気になったからです。

このお話は人間のお父さんと人間の姿をしているお母さん、そしてキツネの血が流れている三人の子どもたちがチビ竜に会って、さまざまな事件にまき込まれるお話です。

私が心に残った場面は三つあります。

一つ目は、夜中に目が覚めた長女のユイがお茶を飲みに台所へ行くと、長男のタクミが卵をからごと飲み込むところを見てしまいます。チビ竜に食べさせるための魔法の実と一緒にもらった蛇の目石というヘビ達の宝物を持っていたせいでヘビ化してしまったのです。もし私がユイだったら弟が卵をからごと飲み込んだなんてびっくりして何も言えなくなると思うので「何してんの？」と聞けたユイがすごいなと思いました。

二つ目は、ある事がきっかけで「蛇の目石」を持っているタクミの家にヘビの大群が押し寄せて来るところです。ヘビの大群は自分達の宝物である「蛇の目石」を返してほしくて、頭をピンと立ててタクミ達をずっと見ていたのでした。私だったら怖くて大きな声を出してしまうかもしれないので、静かにしていた三人の子ども達は冷静だなと思いました。

三つ目は、雲竜の子どもの体が小さいままだと空に帰れないと思い「魔法の実」を裏山で食べさせて体を大きくしようとしますが、裏山ではなく家の中で大きくなってしまい、家が破れつする寸前で竜の成長が止まるところです。私は、マンションのとなりの部屋に住んでいる森田さんに知られたら大変なので、気づかれないか心配でしたが、お母さんが森田さんの気をひいている間に家族みんなで協力し、無事にまどから空に帰すことができました。

私はどんな事があっても家族で協力し支え合ったからこそ、様々な事件を乗り越える事ができたんだと思います。なので、これからも協力し支え合って、一人ではできない事や難しい事も家族や友達と乗り越えたいです。

＊講　評＊

本を読んだきっかけ、あらすじ、心に残った場面と感想がバランスよく書かれていたと思います。特に、「私だったら」と登場人物に自分を置き換えて感想を書いているところが印象的で、物語に入り込みながら読めていたのだろうなと思えました。

一人ではどうしようもないことも、誰かがいれば乗り越えられることはいろいろあります。家族でも友達でも、協力してくれる人たちを大切にしていきたいですね。

★佳作

『「どうせ無理」と思っている君へ　本当の自信の増やし方』を読んで

利尻小学校　六年　牧野（まきの）　泰希（たいき）

読書感想文を書くにあたってどの本にしようか迷っていた時、おすすめの本で紹介されていたこの本に目が止まりました。タイトルに惹かれ、「どうせ無理」この言葉は僕も無意識に使っているかもしれない、「本当の自信の増やし方」とはどういうことなのか気になりこの本を選びました。

この本は、君が自信を持って何かを「やる」ための本です。夢を叶えようと、スタートするための本です。

そしてこれは、「自分が信じられない」という君のための本。「何をやるか、わからない。夢を叶えるなんて無理」という思い込みを、君のなかから消すための本です。

この言葉は冒頭に書かれていた言葉ですが、そこに書かれている通り「どうせ無理」という呪文に負けないための方法がたくさん書かれている本です。著者の植松努さんは北海道でロケットをすべて自分達で作り、打ち上げることができる会社を経営されているそうです。植松さんはたくさんの大好きなことを行動にして仲間と一緒に夢を叶えたすごい方でした。

この本には印象に残る言葉がたくさん出てきます。その中でも僕が印象に残った言葉を二つ紹介します。まず一つ目は”本当の自信の作り方“です。自信とは、できなかったことができるようになった時、自分の能力が増えたことを感じられた時、自然と生まれてくる「自分を信じる力」だと書かれていました。そしてその中に「夢は一つでなく、たくさん持とう」という言葉がありました。本文には、夢はたくさん持ったほうが良いという言葉がたくさん出てきます。僕は、夢は一つに絞らなければいけないと思っていました。しかし、夢とは大好きなことややってみたいことであり、必ずしも一つのことだけではなくどんな小さなことでもそれが夢であり、大切なことだと教えてもらいました。僕はまだ夢はありませんが、好きなことややってみたいことはたくさんあるので自信を持って色々なことに挑戦してみようと思いました。

二つ目は”君の最高の味方は、君自身“です。この言葉を見た時、僕は自分のことを一番よく知っている自分が一番の味方なんだ！と思いました。ここには「失敗はラッキーのはじまり」という言葉がありました。失敗は君を強くたくましくし、君に自信をつけ、君を優しくする。失敗する自分を認められる人は、人の失敗も受け入れられるし、失敗した誰かを助けられると書かれていました。僕もそんな人になりたい、心からそう思える言葉でした。僕もたくさん失敗したことがあります。失敗したことをとても後悔し、自分を責めたりすることもたくさんありました。しかしそうではなく、これからは失敗したこともプラスに考え、人の心を大切にできる人として自信を持っていこうと思いました。

僕はこの本を読んで、「失敗してもいい」「やってみることが大事」「夢を大切にする」ということを学びました。僕も植松さんのようにたくさんの大好きなことを見つけ、大切な仲間と一緒に一日一日を大切に過ごしていきたいと思います。自信を失っている人、これから何か挑戦しようと思っている人がいたらぜひこの本を読んでみてください。

＊講　評＊

印象に残った言葉について、その言葉を知る前の自分の考えと、言葉を知ったあとの考え方の変化について書けているのが良いと思いました。たくさんの夢を持って、自分自身の味方であり続けてあげてください。読書で出合ったたったひとつの言葉が、その後の人生に変化をもたらすことがあります。そんな体験になっていたら本好きとしては嬉しいです。

表紙イラストを描いてくださった松前彩夏さん

利尻にまつわるさまざまなものをモチーフにして雑貨・おみやげづくりをしています。
見れば見るほどじわじわくる味のある(？)イラストと、ありそうでなかった商品の展開をモットーにちまちまと作っています。
利尻島内外の各商店様で商品を販売しています。見かけたら愛でてあげてください。

雑貨屋
ひっぱりだこ
利尻謹製

【Instagram】
@zakkaya_hipparidako
こちらから

@ZAKKAYA_HIPPARIDAKO

＊評価基準と講評について＊

○あらすじと読後の感想が書かれていることを基本とし、選書理由・自身の経験や境遇との比較・本から得た何かしらの気付きといった部分を深めている作品を選びました。理由としては、この部分こそ、その書き手にしか書けないものであると考えるためです。自分の言葉で書く、自分の考えを表明するといった自己表現ができると、自分の価値基準のようなものを形作っていきやすいのではないかと思います。

○奨励賞としている作品については、前の選定理由を踏まえつつ、少し物足りないと感じるもの、あともう少しというものを選んでいます。それとは別に、「視点の面白さ」という部分を評価し、読書感想文としては未熟なものの、その切り口を大切にしてほしいと感じたものも選んでいます。

中学生の部

優秀作

「鏡の孤城」

鴛泊中学校　一年　八重樫（やえがし）　千夏（ちなつ）

本作は学校での居場所をなくし、閉じこもっていた中学生の安西心が主人公です。ある日、心は眩い光とともに現れたオオカミ様によって鏡の中へと招待されます。城には心と同じような境遇の同年代の少年少女が招待されていました。アキ、フウカ、リオン、スバル、マサムネ、ウレシノの六人です。

オオカミ様と名乗る少女は、どんな願いも叶えられる鍵を探すことを提案します。しかしルールがあり、隠されてある鍵を期限までに見つけること、朝九時から夕方五時までしか城にいてはいけないのの二つです。

私は「鏡の孤城」を読んで、「人や仲間との絆の力の大切さ」について考えさせられました。本作は序盤から終盤にかけて七人の心情が徐々に変化していきます。序盤の七人は協調性に欠け、お互いの考えの違いですれ違いが生じ、険悪な関係が続きます。しかしオオカミ様のもとで、城の中で共に過ごしていくうちに心たちが背負っていた問題を仲間に打ち明けることで、七人のなかで絆が芽生えていきます。学校にいけないことを後ろめたく思い、孤立していた心も自分だけ辛いのではなく、城にいる六人も等しく辛いのだと気づいていきます。そうして交流を深めていった、終盤では七人は親友と呼ばれる仲になり、「一生皆の事を覚えていたいと」言える仲になっていました。

私は、自分と同じ気持ちを抱える人が寄り添ってくれるだけで人はここまで変われるのだなと感じ、絆の力は改めて凄いと思いました。このようなことはバドミントン部に所属している私にも通じることだと考えました。私は運動が苦手でバドミントンは全然上達しません。なぜ私は運動が苦手なのにバドミントン部に入っているのか疑問に思うことがよくあります。

しかし、練習に一生懸命取り組んでいる同級生や先輩の真剣な目を見て、頑張ろうと励まされ日々練習に取り組んでいます。私と同じ様に心は、仲間が自分の抱えているものと闘っている姿を見て学校に行く決意をしていました。

本作は仲間との絆の大切さを描いているだけでなく、主人公たちの繊細な心情やストーリー、セリフにもこだわって書かれています。

そんな本作の魅力は三つあると私は考えます。一つは登場人物や鏡の孤城のキャッチコピーが心に響くものが数多いところだと考えます。実際に私は本作を読む前、インターネットで鏡の孤城のキャッチコピー「君を、一人にしない」を目にし、シンプルですが何故か心に響く言葉に心を惹かれ本作を

読み始めました。私の周りにも本作を読んでいた方がおり、この本の魅力を聞くと、その方はセリフ一つ一つに登場人物の繊細な心情が込められていて、その人の強い葛藤が伝わってくるところだと言っていました。

二つ目は伏線の張り方や回収の仕方が非常にきれいなことです。物語の序盤から中盤にかけてところどころ読者の気を引く伏線を張り、終盤で綺麗かつ一気に伏線を回収します。伏線を長くもたせる事により結末を想像したり予想をたてたりしながら物語を楽しむことができました。私は、終盤でオオカミ様の正体がわかったとき、自分の予想していた正体とは異なり非常にびっくりしました。

三つ目はタイトルの意味にあると思います。タイトルの「孤城」の意味は敵に囲まれて退路を失った城という意味です。本作の主人公は「敵」のクラスメイトにいじめられ学校での居場所「退路」をなくし家に引きこもっていましたが、鏡の向こうにある城で同じ境遇の少年少女に出会い変わっていくというストーリーなのでタイトルと物語の内容がマッチしていて非常に素晴らしいと感じました。

以上の三つの魅力を通して「鏡の孤城」は、今部活動で仲間と共に汗を流し、笑いあっている人や一人で悩んでいる人にぜひ読んでほしいです。きっと本作は「前に一歩進む勇気」や仲間との絆の大切さに気づき成長できる一作だと思います。

＊講　評＊

あらすじ、本を選んだ理由、物語の軸、自分の経験、作品の魅力の考察と内容が充実した感想文でした。

作品の内容と通じる自分のバドミントンでの経験について書けており、「人や仲間との絆の力の大切さ」を作品からも経験からも改めて感じられたのではないかと思います。

また、『鏡の孤城』自体の魅力について考察できていて、作品を隅々まで味わったのだろうことが伝わってきました。本を選ぶ理由にもなったキャッチコピーのことにまで言及していましたね。シンプルなのに、心に響く言葉に惹かれて本を読み始めた、というところから言葉の力を改めて感じられた気がします。

優秀作

君と会えたから

鴛泊中学校　二年　廣澤（ひろさわ）　一心（いっしん）

僕は、喜多川泰さんの「君と会えたから」という本を読みました。最初は、ただ感動する物語なのかなと思って読み始めてみましたが、読み終わると自分のこれからの生き方や、人との出会いについて深く考えさせられました。この本は単に面白いだけでなく、大切なことに気づかせてくれる、そんな一冊でした。

主人公の優真は、将来のことにやる気も希望も持てない高校生です。そんな彼が、ある一人の女性と出会い、少しずつ考え方や行動を変えていきます。その女性は、特別な力を持っているわけでもなく、ただ優真に言葉をかけたり、質問をしたりするだけです。でも、その言葉の中には、大人になってからではなく、今この瞬間を大事に生きることの大切さが込められていて、読んでいてとても心に響きました。

特に印象に残ったのは、「今日という日は、人生の最後の日かもしれない」という言葉です。僕は普段、毎日が当たり前のように過ぎていくと思って生活しています。だけど、この言葉を読んだとき、「もし明日が来なかったら、今日一日をどう過ごしただろう」と考えてしまいました。そう思うといつも面倒と感じることや、家族との会話、友達との時間さえもとても大切なものに思えてきました。

また、物語を通して、人との出会いの大切さにも気付かされました。優真は「あの人」と出会うことで自分の可能性を信じることができるようになります。僕もこれまで、たくさんの人に出会ってきましたが、その中には、僕を励ましてくれたり、考え方を変えたりしてくれた人がいます。そうした出会いがあったからこそ、今の自分がいるんだと改めて思いました。そして、

これからもきっと、人生を変えるような出会いがあるかもしれないと思うと、これから先の毎日が少し楽しみに思えてきました。

本を読み終えたとき、僕はなんだか心が温かくなり、少し元気をもらった気がしました。読書というのは、ただ物語を楽しむだけでなく、自分を見つめ直したり、新しい考えに出会えたりするものだということを実感しました。今まで僕は、読書をあまり得意だと思っていませんでしたが、この本を読んで、もっといろんな本を読みたくなりました。そして、自分の中の何かを変えてくれるような本に、これからも出会っていきたいと思いました。

「君と会えたから」は、「今をどう生きるか」「人との出会いをどう大切にするか」という、すごく大事なことを教えてくれました。優真のように、僕も誰かとの出会いを通して変わっていけるような、そんな人になりたいです。そして、誰かにとって「あの人」に、自分自身がなれるような生き方ができたらすてきだなと思いました。

＊講　評＊

全体的にまとまりが良く、物語と印象的な言葉について、自分の経験と合わせて感想を書けていました。随所で作品を通して自分自身と対話ができていたのだろうと感じられました。

人との出会いが今の自分を形作っている、ということに気付けているのもいいですね。今まで良い出会いをたくさんしてきたのでしょう。これからもその関係を大切にしたいですね。

出会いといえば、ある本との出合いで突然いろんな本が読んでみたくなることがあります。素敵な本との出合いもできたようですね。ぜひ、いろいろな本を手に取ってみてください。合う、合わないはあると思いますが、また良い出合いがあることを願っています。

★佳作

「透明なルール」を読んで

鴛泊中学校　一年　岩木（いわき）　莉那（りな）

「みんな自分らしく生きる」これは私が「透明なルール」を読んで最も大切だと思ったことです。この本を選んだ理由は、本の帯に書かれていた「みんな違ってみんないい、とかって道徳で教えるくせに、全然そんなじゃない」という言葉に惹かれたからです。この本は、透明な見えないルールに立ち向かってゆく三人の中学生の物語です。主人公の「佐々木優希」の生活では、成績がいいことがなんだか恥ずかしくて隠したり、かわった趣味を友達に言えなかったり、人の目を気にして自分らしくいられない、生きづらさがありました。そんなときに、こけしというかわった趣味を持つマイペースな「荻野誠」、特別な才能と生きづらさをあわせ持つ「米倉愛」と出会います。

この物語の中盤で、体育祭のスローガンを決める話し合いが始まりました。その時に、不登校気味の愛はいません。話し合いの中で「心ひとつに」という案が出ます。その案に賛成の声が上がっていたとき、「『心ひとつに』なんて大嘘だよ」後ろのドアに人影が現れます。全員がドアに向かって一斉に振り向くと、そこには愛がいました。「心ひとつって何それ。三十五人いれば、三十五通りの心があるんだから」愛は言い放ちました。その後、愛は「ごめんなさい」と言って教室を出て行ってしまいましたが、私はこのときの愛のことをとても尊敬しました。なぜなら、愛はすぐに出て行ってしまったけど、自分の思ったことをはっきりと伝えたからです。私だったら話し合いのときに、自分の思ったことをはっきりと伝えられないです。このはっきりと言えない理由はきっと人の目を気にして、透明なルールに縛られているからだと思います。ですが、二回目の話し合いを読んで、「透明なルール」は自分で勝手につくったものであり、実際はそうではない、ということがわかりました。二回目の

話し合いで、「どんな意見であってもみんなで自由に言い合いたい」という思いを込めて透明なルールの話をします。その話の中で、優希は「こういう場でも、反対意見を言ったら嫌われるんじゃないかって、それなら黙っておこうって、何も言わない。でも本当は、反対意見を言ったって、嫌われたりしないのに」といいます。この言葉に、私は納得しました。私も話し合いで反対意見を言えないのは、「嫌われたくない」という感情があったからです。でも、優希が言ったように実際は反対意見を言ったって、嫌われたりしません。だから、私は自分が思ったことを言ってもいい。透明なルールは自分の勝手な思い込み。「自分らしく生きていい」と思いました。

一回目の話し合いで愛が、「三十五人いれば三十五通りの心がある」といったように、人の数だけ、それぞれ違う思いがあると思います。これに気づいても、「自分らしく生きる」ことには勇気が必要です。それでも、勇気を出してみんなが自分らしく生きられたら、きっと毎日がもっと楽しく、充実した良い日々になると思います。

＊講　評＊

選書理由、あらすじ、印象的な場面の感想をバランスよく書けていたように思います。登場人物の行動や言動に対して、自分の気持ちをしっかり書けていました。

「自分らしく生きていい」というのは当たり前として、それを難しくしているのが透明なルール。このルールは個人レベルだけでなく、社会のあちこちにあります。勇気を出して、ルールに立ち向かいたいものですね。

★佳作

「読書感想文が終わらない！」を読んで

鬼脇中学校　一年　山谷（やまや）　詩葉（ことは）

私は夏休み中、何の本を読もうか考えていました。戦争の本や障害のある人の本を学校から借りてきたけれど、難しくてすぐに読むのをやめてしまって悩んでいました。そして、何週間も過ぎたころ、友達と本を借りに公民館に行きました。でも、いい本がなくて困っていました。そんなときに見つけたのが「読書感想文が終わらない！」という本でした。タイトルが気になったのと、今の私にぴったりだなと思い、すぐさま借りました。

この本は、小学校の図書館にいる変な中学生「フミちゃん」が読書感想文が書けなくて困っている五人の小学生を助けてあげるというお話です。私はこの本を読んで、いいなと思ったことが二つあります。

まず、フミちゃんが読書感想文の書き方を教えてくれるのですが、そこで、私はこんなに読書感想文って書きやすいんだと思いました。その理由は、読書〝感想文〟は読んだ本を紹介することではなく、その本を読んだ自分のことを書くということです。いままで私は、あらすじを書いて読んだ感想や心に残ったシーンを書いていたけれど、この本を読んでからのこの感想文はとても書きやすいなと思いました。

二つ目は、私に似ている人がいたことです。私はよく小さな嘘をついてしまいます。友達にあわせて嘘をついてしまったり、親にも嘘をついてしまうことがあります。六年生の優衣という人が出てくるのですが、その子も友達と楽しく過ごすため、空気を悪くしないために嘘をついてしまうのです。私と優衣はそんな自分に疲れたり、ダサいな、嫌だなとなったりするんです。そんな優衣にフミちゃんはこんな言葉をかけます。

「読書感想文ってさ、自分のことを書く作文なんだよ」

「だから、むねがモヤモヤして苦しいときは、本を読んで、思ったことを作文にしてみると、ちょっと楽になると思うよ」

私は、この作文を書いている時本当に気持ちがすっきりして、この言葉は本当なんじゃないかなと思いました。私も優衣と一緒でいきなり変わるのは難しいけれど、少しずつ変わっていったり、そんな自分を好きになったり、この本を通してこれから変わっていこうと思いました。

＊講　評＊

まさに「読んだ本を紹介することではなく、その本を読んだ自分のことを書く」のが読書感想文です。この作品を通して読書感想文の書き方、書きやすさに気付けたようですね。

自分自身を振り返ってみる、気持ちを確認してみる、それを自分の言葉で書いてみる、そして自分の外に出してやると気持ちはすっきりします。感想文を書きながら、そんな体験ができたのではないかと感じられました。

★佳作

あの花が咲く丘で君とまた出会えたら

駕泊中学校　二年　佐々木（ささき）　凛花（りんか）

私は「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら」という本を読みました。この本は、現代の中学生の女の子が戦争中の日本にタイムスリップしてしまうお話です。私は戦争の話が苦手で、この本を買ったときは最後まで読み切れるか心配でしたが、戦争の残酷さやその中でも必死に生きることの大切さを教えてくれたこの本を今ではとても好きになりました。

主人公の加納百合は、毎日の生活に不満があり、防空壕に逃げ込みました。夜が明けて目を覚ますと、一九四五年の日にタイムスリップしてしまっていました。百合はそこで特攻隊員の佐久間彰と出会い、強くて優しい彰に叶うことはない恋をしました。それをきっかけに百合の社会への考え方がどんどん変わっていきました。

この本を読んで印象に残った場面は、一つ目は彰や他の特攻隊員たちが「出撃命令が出た」と知らせるところです。百合は今の日本を知っているので、あなた達が行く必要は無い、と何度も止めていたところに感動しました。二つ目は白い百合が咲く丘で彰と百合が二人で話をする場面です。ここでも百合は止めましたが、彰は決心していて、心は動きませんでした。この場面で二人が両想いなことがわかりましたが、二人にはもう時間が残されていないのがとても切ないと思いました。好きな人が空の向こうに行ってしまう百合も、好きな人を置いて行くしかない彰も、どちらもとても辛かっただろうと思います。最後の三つ目は、隊員たちが特攻に行く場面です。見送りに来た人たちが皆、隊員たちのことを英雄や神様と言っているところ、百合だけが彰に行かないでと泣いて言い続けていました。戦闘機には、片道分の燃料しか積まないので、飛んでしまったらもうそこで終わりなのです。好きな人を失うのは誰でも怖いと思います。私は普段小説や映画などで泣くことはないですが、この場面はどうしても涙がでてしまいました。その後、百合は無事に現代へ帰ることができましたが、百合は彰のことを一生忘れることはできないと思います。百合と彰の恋は叶うことはなかったけれど、とても儚くて綺麗な恋だと感じました。

この本は、私が読んできた中で一番好きな小説で、何度も読み返しています。読むたび感動で胸が一杯になりますが、私が生きている今は昔の人が人生をかけて守ってくれたからだと実感させられる素晴らしい本です。

＊講　評＊

簡潔にまとまっていた感想文でした。印象的な場面を言及しつつ、登場人物たちの心情を丁寧に汲み取っています。自身も心が揺さぶられたのだろうことが感じられました。

「戦争の話は苦手で、この本を買ったときは最後まで読み切れるか心配」だった本が、「一番好きな小説で、何度も読み返す」ほどの出合いになったことは、とても喜ばしいですね。

★佳作

52ヘルツのクジラたちを読んで

鴛泊中学校　三年　工藤（くどう）　結菜（ゆな）

52ヘルツのクジラと聞いたら、どんなクジラを思い浮かべるでしょうか。この本は52ヘルツで鳴くクジラのような人たちの物語です。

家族に搾取され傷ついた過去をもつ貴瑚。そんな貴瑚が小さな町で暮らし始めたとき、一人の少年と出会います。名前は「ムシ」。虐待をされ続け、その影響で声を発することができず、親からムシと呼ばれ、人間の扱いをされていませんでした。そんなムシを、貴瑚はかつて救ってくれた一人の人間、アンさんとの日々を思い出しながら、救っていきます。

この物語に出てくる三人はみんな52ヘルツのクジラでした。52ヘルツのクジラとは、鳴き声が高すぎてどれだけ鳴いても、仲間のクジラには聞こえない孤独のクジラ。

私はこの本を読んで最初は悲しい物語だと思いました。

主人公や登場人物の過去を知り、胸が締め付けられるような気持ちになったからです。しかし読み進めていくうちに、この小説は絶望のあとでも「救い」や「希望」が存在することを教えてくれたのです。

貴瑚がムシを受け入れ、ムシの声を聞き、救ったのは、過去に誰にも声が届かなかった彼女、それでも唯一彼女を救ったアンさんの存在があったからこそできるものでした。

私は今現在幸せなことに誰にも声が届かないわけではなく家族や友達、先生に助けを求めることができています。なので最初にこの本を選んだときほんとに声が届かないのだろうか、助けを求めれば助けてくれる人は回りにいると決めつけてしまっていました。ですがこの本を読み、環境や個人の価値観や性格のせいで心の中では逃げ出したい、助けてと叫んでいるのに、うまく「言葉」に、「声」に、できない人達がいること、その声を見つけ出し救ってあげることの大切さに気づきました。

この本を読んで52ヘルツで鳴いているクジラのように助けを求めても気づいてもらえない人がいることを知り、そのような人をこの世界から一人でも多く救いたい、声を聞いてあげたいと感じました。全員の声を聞いてあげることが難しくても一人でも多くそんな人たちに気づいてあげることができる人が増えればいいなと思いました。

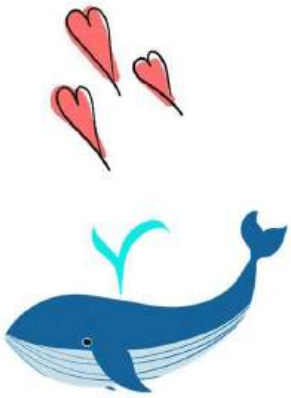
そしてこの本は、頑張りすぎて「限界」と思っている人、一人で不安を抱えている人、だれかを守りたいという気持ちがある人に読んでほしいです。限界で終りを迎えたくなるときに、少しでも希望を持って、すこし立ち止まり、人とのつながりを信じて鳴き続ける勇気、周りの人の孤独やＳＯＳに気付けるきっかけをくれます。この本で描かれている出会いや救いの描写はそんな人たちの温かいメッセージとなると思います。

＊講　評＊

本を読む前とあとの自分の考えの変化について書けているのが良かったです。

本を読んだときの第一印象が「悲しい」であったところから、読み進めていくことで「救いや希望がある」物語であると印象が変化していったこと。それから、「声」が届かない、届けられない人たちへの認識の変化がよくわかりました。

誰かの助けてほしいという声に気付くことはなかなか難しいことですが、気付いたときに手を差し伸べられるといいですね。



★佳作

「知らぬ間に」

鴛泊中学校　三年　須田（すだ）　海司（かいじ）

現在、私たちは、インターネットを使用して、世界中の人たちと繋がることが出来る。ふと、気になったことを、すぐに調べることだって出来てしまう。それに加えて、ここ数年の生成ＡＩなどの、異常なまでの進化。このような状況に、私は危機感を抱き始めていた。

ある日、インターネットを使って調べ物をしていると、一つの広告が目に飛び込んできた。

「『依存症ビジネス』のつくられかた。僕らはそれに抵抗できない」

内容が非常に気になったので母に頼み、買ってもらった。

行動嗜癖というものには、

・ちょっと手を伸ばせば届きそうな魅力的な目標があること
・抵抗しづらく、また予測できないランダムな頻度で、報われる感覚
・段階的に進歩、向上していく感覚があること
・徐々に難易度を増していくタスクがあること
・解決したいが解決されていない緊張感があること
・強い社会的な結びつきがあること

という六つの要素がある。現代の行動嗜癖は多種多様だが、このような要素を一つ以上、必ず備えているという。この本では、そんな行動嗜癖とは一体何なのか、新しい依存症が人を操る六つのテクニック、それに立ち向かうための三つの解決策について、様々な研究や依存症を経験した人たちの実体験などを交えて書かれている。

あなたは、依存症の人がどの程度いると考えるだろうか。

この本を読み進めていく中で、「40パーセントの人が『依存症』―!? あなたも無縁でいられない」という言葉が目に留まった。これまで私は、依存症になる人は、ごく少数で依存症というものは、自分には遠くにあるものだと思っていた。しかし、現実は違っていた。四大陸で合計百五十万人を対象に行われた研究によって導き出されたのは、全体のなんと41％が、過去一年間に少なくとも一つの行動に依存的に従事しているという事実だったのだ。勿論入院したり、日常生活を送ることが難しくなったりするような、害の大きい依存症は極めてまれで、発症するのに人口の数％程度だが軽度なものも含めると、人口のおよそ半分を占めている。その事実に、私は衝撃を受けた。それと同時に、もしかしたら、自分も依存症になってしまっているかもしれないという、恐怖に襲われた。思い返してみると、そもそも、この本を読みたいと思ったきっかけである、インターネットの広告。これも、「依存症ビジネス」の一部なのだ。仕組みを知ることが出来たら、それを何かに利用出来るかもしれない。などと考えていた私だったが、すでに「依存症ビジネス」に利用されていたのだ。なんとも複雑な気持ちである。

このように、誰もが知らぬ間に「依存症ビジネス」に利用され、のめり込んでゆく。依存症になるかもしれないのだ。軽度なものであれば問題ないと考える人もいるだろう。しかし、軽度なものであっても、依存症を抱えていると、生活の質が落ち、仕事や勉強、遊びですら力を発揮出来ず、他人との交流も希薄になる。それが積み重なることで、人生の価値が著しく損なわれてしまうのだ。私は、絶対に、価値が著しく損なわれた人生を送りたくない。そのためにも、日々の情報機器やインターネットなどとの付き合い方を考えていかなければならない。

私も、あなたも、既に依存症かもしれない。

「すべては、罠である。」

＊講　評＊
選書が面白いです。まず、この本で読書感想文を書けるのがすごいと思いました。そして、感想文を読みながら不安をあおられたのは初めてでした。
時事的な関心があることも伺えますし、その危険性やすでに依存症に陥っているかもしれないという恐怖感を淡々と、しかし素直に書けているのが良かったです。感想文のタイトルも良いですね、本当に「知らぬ間に」陥っているものですからね。

★　奨励賞

「障害者からみた社会の不安と恐怖」

鴛泊中学校　二年　谷村（たにむら）　柊太（しゅうた）

私がこの本を選んだ理由は障害者の本を見つけて障害者は普段の生活でどのような過ごし方をしているのかを知りたくて選びました。この本は障害者の不安や恐怖、普段の生活について書かれた本です。私がこの本を読んで印象に残ったことは障害者は恐怖や不安があるということです。なぜ印象に残ったかというと私は障害を持っていないので障害者と同じような経験をしたことがないので考えたことがありませんでした。しかしこの本を読んで目が見えない障害を持っている人は電車の隙間に落ちてしまうかもしれない、誰かにぶつかって、怪我をさせてしまうかもしれないと書いていたので印象に残りました。私は部活の遠征のときに電車の駅で目が見えなくて、中々電車から降りれていない人がいました。僕は心配をしながら見ていましたが、駅員の方が場所を教えたり肩を組んで落ちないようにしたりしてその障害を持った方は笑顔でお礼をして電車から降りていました。それを見て今回は駅員さんだったけどもしその場に自分しかいなかったときに目が見えなくて困っている人がいたら自分から声をかけて助けてあげることはできるのかを考えました。この日本では誰かがやってくれるという考えを持つ人がたくさんいると思います。けどもしみんながずっとその考えをしていたら障害を持った方は誰にも助けてもらえなくて怪我をしたりしてしまうかもしれません。その時に私は自分から助けに行けると思いました。私は誰かがやってくれるんじゃなくて自分から動くと障害者の方も笑顔でお礼を言ってくれるかもしれません。そしたら自分も笑顔になれると思います。私がこの本を読んで伝えたいことは、障害者の方が話している本を見ると、人に助けてもらったときに迷惑をかけていると思っている人がいて、助けたら障害者の方も助けた人も笑顔になれるので迷惑はかけていないということを伝えたいです。障害を持っていない人には誰かが助けないと障害者の方が助からなくていい思いをする人がいないから人に任せるのではなく自分から助けに行ってほしいということを伝えたいです、私はこの本を障害者のかたや、障害者の家族などに読んでもらいたいと思いました。私はこの本を読んで障害者の方に恐怖や不安を持たせないようにしたいと思いました。

＊講　評＊
障害というものへの関心、それを持つ人々を理解したいという気持ちが表れていました。
他人が読むものだという点はもう少し考慮が必要です。改行したり、段落を分けたり、読点を入れたりすることで読みやすさは変わります。意識してみましょう。

★ 奨励賞

13歳からの地政学

鴛泊中学校　三年　矢田（やだ）　蓮允（れいん）

僕は13歳からの地政学という本を読みました。きっかけはお母さんがこの本を読んでいて普段からたくさん本を読んでいるお母さんからおすすめされた本でいつもは「この本読んでみたら?」くらいのお母さんに対してこの本を何度も何度もすすめられたため読もうと思いました。最初はいやいやこの本を読もうと思っていたのですがいざ読んでみるとこの本は内容がとてもわかり易く社会が正直あまり好きではなかった。

僕はこの本を読んで歴史や地理そして多角的に見る視点がどれほど面白いことかにきづくことができました。この本は社会を見る視点を養う本だと思っています。例えば今でも世界の中では人種差別や民族間での争いが起きているのを知っていますか?僕はあまり他の国に興味を持たなかったためそういうのは別にいいやと思っていました。ですがそれは日本人や列強の国たちの「悪い癖」なんです。これをこの本では「内向的」と言っていました。内向的な考えになると今の視点があっていると勝手に思ってしまうのです。なので相手の意見を受け入れるのに苦労したり自分の意見が正しいから他の人の意見はほとんど取り入れないなど最終的には自分勝手な人になってしまいます。他にもアフリカは「気温が高く暑い国」と思っている人もいると思います。ですがそれは大きな間違いです。アフリカは一部を見れば暑い国があるかもしれませんが、実際は日本よりも気温が安定した国なんです。

上の文章を読んでみてどうですか、アフリカの部分で言えば勘違いしている人もいると思います。実際僕はそう思ってしまった人間なんです。少し僕は決めつけすぎている部分があるのかもしれません。だから中山先生はいつも「多角的な視点で歴史の人物やできごとを見なさい」と言っていたんだなと改めて社会をもっと知りたくなりました。僕はこれからはもっと自分の知らなかった世界の事情や考え方、文化に触れて自分の考え方や多角的な視点をもっと広げて深く考えられるような人になりたいです。

＊講　評＊

選書理由がいいですね。お母様との仲の良さを感じました。本の内容について、関心を持って読めているのだろうことも感じられました。

全体的に伝えたいことはなんとなくわかるのですが、文章が「話し言葉」であることが気になりました。感想文は「書き言葉」で書いてみましょう。

「自分の言葉を培っていく」

淡濱社　濱田実里

読書感想文コンクールに関わるのも三回目となりました。今年もたくさんの感想文と本と出合うことができました。ありがとうございました。そして、お疲れ様でした。

今年、改めて思ったのは自分が感じたことや気持ち、自分の考えたことを文字で伝える難しさです。感想文の文章というのは、文字だけのコミュニケーションで、話しているときと違ってそこには顔の表情や声の明るさ・暗さといったその他の情報がありません。スマホで文字をやり取りするときは、LINE のスタンプのようなものがあったり、絵文字があったりします。これがあると気持ちはわりと伝わりやすくなりますが、感想文では使えません。

誰が書いているのかわかれば、その人の好みや性格を思い出しながら文章を読むこともできます。しかし、私が読書感想文を読むときは名前が伏せられていますし、そもそもお会いしたことがない人がほとんどなので、どういった人なのかもわかりません。

そうなると、頼りになるのは文字だけ。どんな言葉を使って、どんな構成をして、どんな表現で伝えようとしているのか。それでしか判断ができません。付け加えるとしたら、文字のきれいさ（丁寧に書こうとしているか）、原稿用紙の使い方、改行や一字下げなどの文章ルールに従って書かれているかというところくらいです。

自分が感じたことや考えをより正確に伝えるためには、やはりたくさんの言葉を知っていた方がスムーズです。これがいわゆる語彙力というやつです。これは書くときもそうですが、話すときも同じです。

「やばい」という言葉を例に出してみます。今や幅広い意味で使われていて万能になっていますが、その「やばい」は「すごい」「最高」「最悪」「感動した」「危ない」など、より的確な言葉に言い換えることができます。日常的に家族や友人、身近な人に使う分には「やばい」でも構いませんが、顔の見えない誰かに文字だけで伝える時には不向きなのです。なぜなら、あなたのことを知らず、どう「やばい」のか推測できる情報がないから。だから、あなたの伝えたいことが伝わりきらない。

「かわいい」という言葉も使いやすい言葉のひとつですが、「かわいらしい」「愛くるしい」「チャーミング」「可憐」といった言葉に言い換えられます。それぞれ少しずつ感じられるものが変わります。言葉をたくさん知っていると、そのニュアンスによって「かわいい」の中でもより状態や表現したいものに合った言葉を選べるようになります。

言葉を増やすためには、たくさん読書をしないといけないのだろうな、と思ったかもしれません。もちろん読書は良い方法のひとつですが、別に読書でなくてもかまいません。誰かが言っていて心に残った言葉、SNS 等で気になった言葉、意味がよくわからなかった言葉などを自分でしっかり調べてみることが大事です。そして、書き残しておくとより良いです。その積み重ねによって、あなたの語彙力は培われていきます。調べたら使ってみたくなる。使えたら伝わりやすくなる。わかる言葉が増えると、文章は読みやすくなる。伝えるためだけでなく、理解するためにも語彙力はあった方がいいのです。

いろいろ長く書きましたが、本に限らずたくさんの言葉にふれてみてほしいということです。ちなみに、私は本だけでなくゲームでたくさんの言葉を覚えました。

さぁこの文章でよくわからなかった言葉、すぐに調べてみて！

【第三十九回　読書感想文応募校と応募数】

■小学校一学年の部
鴛小　四点
利小　一点

■小学校二学年の部
鴛小　五点
利小　〇点

■小学校三学年の部
鴛小　一点
利小　三点

■小学校四学年の部
鴛小　三点
利小　四点

■小学校五学年の部
鴛小　〇点
利小　四点

■小学校六学年の部
鴛小　一点
利小　五点

■中学校の部
鴛中　三十二点
鬼中　十七点

小学校計	三十一点
中学校計	四十九点
合　計	八十点

（一次審査）応募作を部門ごとに分けて、名前や学校名などを消した状態でまずは各審査委員が全作品を審査し、小学校は学年毎に五編程度、中学校は全体で十編程度に絞りました。
（二次審査）一次審査の結果を参考にして、審査アドバイザーが各賞を選出しました。アドバイザーも同じ条件で審査しています。
（審　査　会）アドバイザー審査委員が集まり、各賞を決定しました。

【審査アドバイザー】
淡　濱　社・・・・・・濱田　実里　さん
【審　査　委　員】
利尻富士町教育委員会
山谷　文人　　高田　慎也　　熊谷　卓耶
【表紙イラスト】　松前　彩夏　さん

● 令和七年度　第三十九回読書感想文コンクールを終えて

この作品集を手に取り、読んでいただき、ありがとうございます。子どもたちの素直な気持ちに、癒される作品もあれば、自分にはない着眼点や発想にハッとさせられる作品もあり、毎年良い体験をさせてもらっています。今年の受賞作の中でいうと「りんごかもしれない」　今回は学年が違うこともあり、同じ本の作品が同じ回で受賞となりました。着眼点も異なり、全く別の作品に仕上がっていると思います。あぁ、本を読むのも、子どもたちが紡ぐ読書感想文を読むのも面白いですね。　・・・審査をしないなら・・・
審査は本当に難しいもので、頑張って書いたのに、優秀作なくていいの？　〇〇と●●評価点高いけど、優秀作じゃなくていいの？葛藤です。ガチ選考です。
話は変わり、今年は濱田さんに「おすすめの本」を紹介してもらい、公民館でコーナー展示をしました。授業で来館し、子どもたちと一緒に本を選ぶといった協力もいただきました。大感謝です。
最後に、感想文を書いてくれたみんな、ご協力いただいた全ての方々、そして、応援してくれたご家族の皆さん、本当にありがとうございました。

利尻富士町教育委員会　鬼脇公民館業務係　係長　熊谷　卓耶

読書感想文コンクール作品集　第三十九号

令和七年十一月　発行

発行者　利尻富士町立鬼脇公民館

印刷所　株式会社　国境